

女のこのためのこわ〜い文芸誌

『Mei (冥)』創刊記念

対談 東雅夫 (『幽』編集長) × 岸本亜紀 (『Mei (冥)』編集長)

(書誌情報)

『Mei (冥) vol.01』

メディアファクトリー

創刊号特別定価 998 円 (税込)

怪談雑誌『幽』の妹雑誌。創刊号は山岸涼子、波津彬子、近藤ようこ、伊藤三巳華、加門七海、辻村深月、東直子、藤野可織ら豪華執筆陣によるほぼ読みきり！

小説、漫画、実話、エッセイなど充実の内容で「異界の入り口」へご案内します。

東 読者の皆さま、いつも『幽』と〈幽ブックス〉ほか関連出版物を御愛読、御声援くださいます。まことにありがとうございます。

今日は『『幽』の妹マガジン』として、このほど創刊される運びとなった新雑誌『Mei (冥)』について、編集長に着任した『幽』編集部の岸本亜紀と、『幽』編集長の私とで、お披露目を兼ねて対談したいと思います。

岸本 はじめまして、こんにちは (笑)。

東 思えば岸本とは長いこと仕事してますよねー (遠い目)。最初は何の仕事をお一緒したのでしたっけ？

岸本 最初は『新耳袋』(一九九八年、弊社より単行本刊行)を『ダ・ヴィンチ』で紹介して欲しいと、当時の担当編集Tが私に売り込みにきたんです。二人で相談して、まずは綺羅星のごとくデビューして三年ほどの京極夏彦さんにグラを送りました。あわよくば感想を伺ったり、お会いしてお話ししたり、一緒に仕事もしてみたいという下心丸出しのお手紙をつけて (笑)。そしたら京極さんから編集部にかかってくる、「この本はメディアファクトリーから出るんですか！ 僕は扶桑社版も持ってます。中山さんとも牛祭りで会ったばかりですよ」と電話がかかってきたんです。そこで著者二人と京極さんで『ダ・ヴィンチ』誌上で座談をしていただこうと思ったのですが、もう一人、作家でない立場から文学的なアプローチで作品の魅力を紹介いただけないかと思って、学生時代からの憧れの雑誌『幻想文学』の編集長であった東さんにお声をかけさせていただいたのが始まりです。

東 憧れねえ……ま、いいや (笑)。かくして京極さんや『新耳袋』コンビと私で怪談之怪が結成され、『ダ・ヴィンチ』で怪談コーナーの連載が始まって……。

岸本 最初は、『新耳袋』の二人の怪談を披露してもらい、京極さんが解説し、

お呼びしたゲストもお話ししてもらおうというサロンの活動が中心でしたが、山岸涼子先生、伊藤潤二さんと豪華ゲストが登場され、そのうち恩田陸さんや綾辻行人さんや小野不由美さんなど、聞きにこられるだけの作家さんも増えてきて（笑）、夏の読者感謝イベントと称して公開イベントに発展していったんです。忙しい京極さんが「妖怪会議、と一緒にやったらどう？」と御提案くださって、角川書店と合同開催になりました。結局、同じグループ会社になってしまいました（笑）。あのころは楽しかったな～（遠い目）。

東 そうした怪談之怪の活動を踏まえて、二〇〇四年に『幽』が創刊できたのも、岸本の精力的な社内的根回しあればこそでしたな。

岸本 充実した根回し期間でした！（笑）

東 そして今回の『Me i（冥）』では、まったく新しいコンセプトの女性向け怪談専門誌ということで、編集の「顔」も女性で行こう！ということから、『Me i（冥）』編集長を務めてもらうことになったわけですが、まずは創刊にいたる経緯を説明してください。

岸本 巻末の編集後記にも書いたんですが、小さいころからあの世とか、悪とか、世界の裏側とか、嘘とか、コックリさんとか、そういうものにばかり興味が行く子どもだったんです。暗いというか（笑）。大学時代の友人に久々にあって、「怪談雑誌やってる」というと、「昔から合宿といえば、岸本の怪談だったよね」と言われるくらい。人の興味を引きたかったんですかね（笑）。時代も時代で周りはそういう心霊女子みたいの、結構いました。女性って、一度はそういうオカルト的な部分を通るのではないかと考えています。小野不由美さんの『ゴーストハント』にも書いてありましたよね、ポルターガイストの発生と、思春期の女の子には関係があると。だから意図的に、女性向けの作品を数年前から刊行してみました。それが大当たり。『見えるんです。』の伊藤三巳華さんが筆頭です。女子向け怪談、行ける、と！

東 私も『幽』をつくりながら、漠然と「ガールズ怪談」というコンセプトを考えていて、それが加門七海さん立原透耶さん伊藤三巳華さんの「怪談三姉妹」とか『女たちの怪談百物語』の企画に結実して、予想した以上の成果を上げて、手応えを感じていました。

岸本 『幽』怪談文学賞からも女性の作家がどんどんデビューしました。みなさん、作風が様々で面白いです。女性ならではの視点って、細やかだし、女って産み落とす性であるから、命に関するうらみつらみや執着は生半可でない（笑）。

東 ひいい。女性と怪談との関係性について、岸本はどんなふうに考えているの？

岸本 根本的にはみな、深い部分で怪談的な業(ごう)のようなものは持っているものだと思うんですが、表向きにそれを言われると引く（笑）。だから、女性

に向けて伝えるときはパッケージが非常に重要だと思っています。佇まいが美しいこと、おしゃれなことは必要だと思います。内容はグロくてもエグくてもいいんです（笑）。

東 雑誌名を何にするかが、なかなか決まりませんでしたね。

岸本 悩みました。なかなか雑誌のコンセプトが言葉にならなくて困りました。多くの人に読んでもらいたくて、表向きは怪談といわなくて、でもちょっと怖くて……みたいな、自分で何を言っているのか分からなくなりました（苦笑）。東さんと京極さんにまでもや助けていただき、ありがとうございました。とくに京極さん。『幽』に引き続き、名付けは二度目のお願いで……。すみませんでした。

……続きは、『怪談実話系 妖』（MF 文庫ダ・ヴィンチ、10月25日発売予定）でお楽しみください。